

# 太陽光発電、新宮港で稼働

## 3か年で事業性など検証へ

二酸化炭素排出量の削減と災害時の電力供給の確保を目指した太陽光発電が28日、新宮港（新宮市）で始まった。国が新宮港埠頭株式会社などに委託した平成24年度から3か年の実証事業で、同じ規模の港湾に導入できるかなど事業性を見極める。

環境省と国土交通省の「炭素化推進事業」で、新宮港埠頭が公募で選ばれた。共同で事業を行うのはエヌエス環境（東京都）、みらい建設（東京都）、きんでん（大阪府）の3社で、技術支援として京セラ（京都府）が参加した。

事業では、宇久井側の緑地帯のり面約1500平方メートルに100キロワット、新宮港埠頭の管理棟屋上約80平方メートルに10キロワットの発電設備と蓄電池などを設置し、蓄電容量などをコン

ピューターで制御できる「グリッド管理システム」で管理する。同システムの採用で、天候により電力の過不足が生じた時、停電時などにも優先順位に基づいた電力供給ができるという。今後はさまざまな実証試験を行う計画で、27年3月に検証結果を国に報告する。

が285キロワット、管理棟が95キロワットで、緑地帯は今事業で導入した電動フォークリフトや照明、管理棟は情報通信システムや冷暖房設備、照明などに使う。運転開始式はこの日、関係者ら約50人が出席して緑地帯の発電設備前であった。新宮港埠頭の小池薫二社長の式辞を代読

した取締役の鈴木俊朗・市経済観光部長は「今後、数々の実証試験を繰り返して、全国の同規模の港湾に非常時にも効果的な低炭素化を推進できるシステムを発信、提案していきたい」。来賓の田岡実千年市長も「全国の類似した港湾の先駆けとして注目を集めることに期待している」と述べた。



新宮港宇久井側緑地帯に設置された太陽光発電設備



開始式で通電のセレモニーを行う田岡市長ら